

経 済

昭和 36 年度（4～9月）上期

畜産物価格の見とおし

（岡山県農業観測資料より）

岡山県農林部では、昭和 34 年度から毎年農業観測を行なって農産物市況予想を公表してきましたが、昭和 36 年度上期（4～9月）分の見とおしを 4 月 20 日発表、それによると畜産物価格の見とおしは次のようになっています。

牛 乳…前年同期よりかなり高い
鶏 卵…前年同期よりかなり安い
ブロイラー…前年同期よりやや下廻る
肉 牛…前年同期よりやや高い
肉 豚…前年同期よりかなり安い
仔 畜…乳牛強含み和牛横ばい豚かなり安い
飼 料…3月の価格程度で横ばい

牛 乳

現 況

○昭和 35 年の岡山県の生乳生産量は 47,000 トンで前年に比し、123%の伸長率を示し全国平均をはるかに上回っている。これを地域別に見ると、美作および備中北部地域の増産率は著しいがその他の地区は全国並（前年比 110%）の増加率であった。県外（広島県、香川県）からの移入量は反対に減少して 3,200 トンで対前年比 88・8%であった。

○昭和 35 年の県内飲用向の牛乳供給量は 20,700 トンで対前年比 119・4%で全国平均を上回って順調であった。

県外（主として大阪・神戸）へ飲用向牛乳としての供給量は次第に増加し、昭和 35 年は総集乳量の 22・7%に当る 10,250 トンを移出した。

○加工向の牛乳供給量は 14,300 トンで前年に比べ 105・7%であった。

○乳価については昭和 35 年 3 月までは農家手取 10kg 当り 240 円 6 月までの 250 円 12 月まで 261 円と順調に推移した。

見通し

○昭和 36 年の生乳生産量は県の積極的な酪農振興施

策と乳価の好調により大巾に増加するものと思われる。

○近時食生活の改善の普及により、飲用乳の需要は天候等に支配されることがあっても順調に増加すると思われる、夏季の最需要期には一時的に牛乳不足を招来することが予想され、輸入乳製品の供給を国に対し要請する必要があると思われる。

○本県の乳価は従来、市乳原料と加工原料との中間的な価格であったが、交通機関の発達その他により、阪神への市乳供給地となり市乳価格として将来格付されることが予想され、強含みに推移し前年同期より、かなり高いであろう。

鶏 卵

現 況

○35 年度上期の鶏卵の全国生産は 47 億個（前年同期比 14%増）で、35 年 4～12 月の期間では前年同期より 15%程度増加したものとみられている。また岡山県の昨年中の鶏卵生産は 4 億 400 万個で 34 年にくらべ 17%上回った。

○鶏卵の消費は近年順調に増加している。全国の 35 年 4～11 月の消費も肉類の高値に加え一時野菜や鮮魚の高値が続いたこともあって都市、農村（ただし農村は 4～10 月）とも前年同期より増加した。すなわち、都市世帯平均（全都市 1 世帯当り）では前年同期にくらべて購入量は 17%、購入金額は 15%それぞれ増加し、農家（全国平均 1 戸当り）の購入量は 5%、購入金額は 8%それぞれ増加した。

○鶏卵の輸出は 35 年に入っても香港向けの輸出が好調なため、4～12 月の輸出は戦前戦後を通じ最高であった前年同期をさらに 7%上廻り 4,844 トン（全国）となった。

○マヨネーズ加工用の鶏卵の消費は、好調に推移し 35 年 4～11 月は前年同期をさらに 22%上回る

岡山畜産便り 1961.05

4,100 トン（全国）となった。また菓子などの加工向けの消費もひきつづきかなり増加したものとみられる。

○35年4月～36年1月の鶏卵の農村価格（岡山県平均）をみると、4月までは前年同期より高水準に推移（35年4月は163円で前年同期比10%高）したが以後は出回りの増加から9月（180円前年同期比2%高）を除きいずれも値りし36年1月には前年同月を12%下回る169円となり、春と秋の価格差は少なかった。

見通し

○36年度上期の全国生産は、35年9月の成鶏めす羽数が34年同月を12%回ったが、その後も35年春びなの発生増（岡山対前年比138%）からみて、成鶏めす羽数は前年をかなり上回っているものとみられる（岡山県36年2月1日現在概数2,195,000羽対前年比17%増）こと。35年秋びなの発生羽数は34年より約60%の増加がみこまれること。

などからみると前年同期をかなり上回るものとみこまれる。

○上期の家庭用の需要は前年同期よりかなり増加をみせるであろう。

一方特需および加工用の需要もかなりの増加が期待されるか、輸出は香港市場へタイ産の鶏卵の進出もあるので前年同期程度であろう。

○上期の鶏卵の農村価格（岡山県平均）は36年1月の169円（1kg当り）より値下りし、前年同期（166円）よりかなり安いであろう。

ブロイラー

現況

中びなで、34年2月価格190円が、春びなの餌付が旺盛となったため、4月上旬110円と暴落し、8月上旬まで、横ばいと云うブロイラー始って以来の不況を呈した、このため、秋びなの餌付は減少したが、夏期における冷蔵品の出回りが増加したため、34年12月に至り、漸く155円の相場を呼ぶ程度にとどまった、然しながら、35年1～2月は品薄のため、200円まで値上りした、この値上りのため、春びなの餌付が多くなり、再び値下げしはじめ、4月にいたり160円まで値下がりがしたが、9月にいたり185円まで、もどり年末には秋びなの餌付けの増加の影響もあり、

やや値下りしたが36年1月は再び185円にもどした。然し1月下旬から再び、値下りしはじめ、2月末現在140円と云う安値をよんでいる。

見通し

○36年度上期のブロイラーの出回りは、昨年米の水産大手筋の食鳥生産への介入によるかなりの増加はあるが、平均した需要の伸びと最近の価格の値下りによる餌付の手控えもあり、やや品薄の影響も思われるものと考えられる。

○上期のブロイラーの農村価格は消費増の影響のため36年2月価格140円より、かなり値上りするが昨年同期よりはやや下回るだろう。

肉牛

現況

近年の耕耘機の普及と、肉需要増によると殺の増加が和牛飼養頭数の減少をきたし、（特に県中南部）牛の価格は大巾に高騰したが、農耕用和牛のもつ特殊性から肉用牛取引が困難となり、35年中の肉牛（和牛）の県内と殺頭数（11,204頭）及び県外移出頭数（21,740頭）は32,944頭で、前年（37,236頭－県内と殺13,677 県外移出23,559）より12%を下回っている。

○枝肉の生産

35年中における県内と殺による和牛（成牛）の枝肉生産量は、と殺頭数の減少に伴い2,133トンと前年（2,539トン）を19%も下回っている。総枝肉量においても、前年（4,079トン）より14%減少している。（この枝肉生産量の減少は全国的な傾向で、食肉供給不足を緩和するため昨年は海外より37,838トン（全国）の空前の枝肉輸入を行った）

○34年度上期後半から次第に値上りをみせた肉牛の農村価格（めす、おす、ぬき平均生体1kg当り県平均）は35年4月の182円からひきつづき値上りし、9月には前年同月を26%上回る193円となった。さらに12月に入り197円、1月199円となり2月は横ばいしている。

見通し

○最近仔畜価格の高値により、生産意欲が相当高まってきているので、36年度上期の肉牛のと殺向け出回りはあまり増加が期待できないので、枝肉の生産は前年同期にくらべ多くは望めないであろう。

岡山畜産便り 1961.05

○上期の牛肉の需要はひきつづき増加するものとみこまれる。

○上期の肉牛の農村価格（岡山県平均）は需要は強いが、豚肉の出回りがかなり、増加するとみこまれるので、36年2月の199円（めす、ぬき、おす平均生体の1kg当り）より、僅かに値下りし、昨年同期（185円）より、やや高い程度であろう。

肉 豚

現 況

○34年度上期後半から値上りして来た肉豚の農村価格（岡山県平均）は、近年になく需要が不均衡になったため、35年4月の199円（生体1kg当）から急騰して、9月には前年同月を42%も大巾に上回る266円となり、近年の最高値をよんだ、しかしながら10月以降、豚肉の出回りが回復する傾向をみせたため、次第に、この高値が修正され、35年10月223円、11月203円、12月199円と逐月下落し、1月194円、2月194円と今年に入り横ばい状態であるが、これは前年2月（203円）を5%下回る価格である。

見通し

〔生産〕 昨年の豚の価格の高騰により豚の飼育熱が非常に高まり、飼育頭数も増加して本年上期には生産が軌道に乗り肉豚の出荷も前年（35年）の同期より遙に多くなると予想されるが、その量は昭和34年の上期程度が増加するものとみられる。

〔需要〕 豚肉の需要は、ひきつづき強い傾向にあるので上期においても家庭用、業務用、食肉加工用とも、前年同期よりかなり増加するものとみられる。

〔価格〕 上期においては、需要と生産のバランスが前年同期よりかなり良くなることが予想されるので農村価格は36年2月の価格（生体1kg当り）194円より、やや値下がる程度で異常に高かった前年同期（228円）よりかなり安くなると思われる。

仔 畜

乳 牛

現 況

35年2月の仔牛（乳牛）の農村価格はホルスタイン種50,000円（生後4～6月めす）、同種系35,000円（同）で、36年2月にはホルスタイン種60,000

円、同種系40,000円とかなりの値上りをみせている。見通し

36年度上期もひきつづき仔牛の導入意欲が強いとみられるので、仔牛の農村価格はひきつづき強含みであろう。

和 牛

現 況

36年2月現在の農村価格は49,875円（めす）で、昨年34,925円より42%も大巾に値上りした。

見通し

36年度上期の仔牛（雌）の農村価格は、最近全国的に生産意欲が非常に高まっているので、保留または導入事業等による繁殖の傾向からみて36年2月の49,875円（めす）程度の横ばいが続くものと思われる。

豚

見通し

36年度上期の仔豚の農村価格（岡山県平）は、昨秋以降仔豚の生産意欲が高まり、繁殖用めす豚の増加で仔豚の出回り増が期待され、36年2月の4,875円（40～50日めす）よりやや値下りし、昨年同期（5,319円）よりかなり安く推移するものとみられる。

飼 料

〔配合飼料〕

○上期の配合飼料の生産は養鶏用、乳牛用とも、前年度下期にひきつづき大巾に増加するものとみこまれる。

○配合飼料の需要は、鶏の飼養羽数の増加もあるのでひきつづき大巾に増加するであろう。

○上期の配合飼料の農村価格（全国平均）は、成鶏用、乳牛用とも36年3月の価格（成鶏用20kg当り729円、乳牛用30kg当り908円いずれも概算）程度で横ばいするであろう。

〔ふすま〕

○上期のふすまの生産のうち、民間ふすまの生産は、小麦粉需要の伸びなやみもあって、前年同期よりわずかに増加する程度であろう。しかし、専管および増管ふすまなど政府操作によるふすまの売渡はは大巾に増加するであろうが、とくに需要期で

岡山畜産便り 1961.05

ある上期の前半には政府の緊急対策もあって、大巾に増加する予定である。したがって上期のふすまの供給は前年同期（51万トン）にくらべ大巾に増加するであろう。

- 上期の需要は、単体用、配合原料用、とも家畜の飼養頭羽数の増加でひきつづき大巾に増加するであろう。
- 上期の農村価格（全国平均）は、政府の市場操作力が強まるので、36年3月の819円（30kg当り概算）より値上りすることはないであろう。

〔麦ぬか（混合）、米ぬか〕

- 上期の麦ぬか（混合）の生産は政府の緊急対策もあるので前年同期（17万トン）の2.5倍に著増し、米ぬかの生産は前年同期（21万トン）よりやや増加するものとみこまれる。
- 上期の農村価格（全国平均）は、いずれも36年3月の価格（30kg当り）麦ぬか762円、米ぬか687円（いずれも概算）程度で弱含み横ばいするであろう。

〔大豆油かす〕

- 上期の大豆油かすの生産は、大豆の輸入が増加するものとみなされるので、前年同期（32万トン）にくらべかなり増加するであろう。このうちとくに飼料用大豆および大豆油かすについては政府の緊急対策もあり、前年同月より大巾に増加するみこみである。
- 上期の飼料用大豆かすの需要は、ひきつづいて強いであろう。
- 上期の大豆油かすの農村価格（全国平均）は36年3月の価格（37・5kg当り概算1,830円より値上りすることはないであろう。

〔とうもろこし〕

- 上期のとうもろこしの輸入は、ひきつづき、前年同期（59万トン）より大巾に増加するであろう。
- 上期の需要は鶏の飼育羽数の増加もあるので、単体用、配合原料用とも大巾に増加するであろう
- 上期のとうもろこしの農村価格（全国平均）は36年3月の価格（37・5kg当り概算1,130円より弱含みに推移するものとみなされる。